



北海道大学医学部新生に贈る言葉

医学研究科長・医学部長 安 田 和 則



新生の皆さん、北海道大学医学部への入学、おめでとうございます。医学の道は一生勉学を続けなくてはならない厳しい道です。しかしこの道は、苦労の裏にある喜びと常に隣り合わせにある、実に遣り甲斐のある道でもあります。医学の道を歩む者は崇高な精神的義務を負い、その一生をかけて2つの資質を培い育む義務があります。その第一は「心」です。人が人を治す医療という行為を行うには、人の心の痛みを理解できる温かな思いやりの心や、病める人の全てを包容できる大きな心が必要であり、またチーム医療を行うには和と寛容の心が必要です。皆さんはこの6年間に、多くの書を読み、自分とは異質の人々と語り、自分の人生を前向きに懸命に生きる中で「心」を養い、人としての「器」を大きく育ててください。その第二は、批判力と応用力です。批判力とは常識に囚われた思考、あるいは時に常識そのものを疑う力です。応用力とは持てる知識を動員して、正解がない問題に対して最善の解答を与えることができる力です。誤診や治療過誤の多くは、これらの欠如に起因します。これらの力を培うには、まず正確で広範な医学的知識を身に着ける必要があります。皆さんが医学部で、まず広く基礎医学を勉強した後、種々の領域の臨床医学を学ぶのはそのためなのです。最近、卒業後の臨床にすぐ役に立つ実用的知識のみを教えてほしいと希望する学生がいますと聞いていますが、その程度の実用的知識のみで人を治せるほど、医学は甘いものではありません。それどころか、最終的に必要な総ての知識に比べれば、医学部6年間で学べる知識はほんの一部なのです。しかし何もあせる必要はありません。一つ一つの科目を確実に、そしてできるだけ深く学んでいけば良いのです。マニュアルに頼って唯一つの正解を探すというような勉強の仕方ではなく、自ら調べ考えた幾つもの解答の中から最善の答えが何かを考えるというような勉強の仕方が大切です。こうして学んだ基盤知識があれば、皆さんが卒業し

た後、正しい批判的討論が交わされる症例検討会等に参加して思考し、先輩が見せる様々な応用の事例を間近に見ることにより、批判力と応用力は皆さんの中に自然と培われるでありましょう。このような卒後のon the job研修は大学病院でしかできない、といっても過言ではありません。研究者を目指す人はもちろん、真の専門医を目指す人は研修の早い時期に大学病院という研修機関を十分に利用することをお勧めします。

次に、皆さんが持つべき将来の目標に関して、一言申し上げます。6年後に皆さんを待ち受ける卒業試験や医師国家試験は、皆さんの人生の一通過点であってゴールではありません。皆さんが普通に勉強しさえすれば、これらを乗り越えられないはずがありません。皆さんにはその先に大きな将来があります。広い視野を持ち、自分の将来に対する夢と目標を持つてください。将来、皆さんが自信を持って自分の夢や目標に挑戦するためには今何が必要かを考え、それを学生時代に出来るだけ身につけるべきです。北海道大学医学部に入学した皆さんには、国民から負託された大きな使命があることを忘れないでください。皆さんの使命、それは皆さんが基礎医学、社会医学、臨床医学等、様々な領域で次の世代を担う研究者や教育者になること、あるいは日本の先進医療を担う指導的臨床医になることです。現在、世界最高レベルにある日本の医療は、肅々とこの使命を果たしてきた多くの先輩によって営々と築かれてきたものです。皆さんはまもなく、この使命を果たしている多くの先輩に出会い、指導を受け、そして未来へ向けて育っていくでしょう。皆さんに、20世紀初頭の思想家ジェームズ・アレンの言葉を贈りたいと思います。「気高い夢を見ることだ。あなたは、あなたが夢見た者になるだろう。あなたの夢は、やがてあなたが何になるかの予言である。」

皆さんが自分の夢を追求するための参考に、医学部学士課程の先にある大学院博士課程について、一言、紹介します。医学が高度に複雑化した現在、医学教育の最終教育課程は学士課程ではなく、大学院博士課程です。博士課程の魅力、それは学部教育にはない「研究」の経験を通して批判力や応用力を学ぶことです。研究者を目指

すにせよ、臨床医を目指すにせよ、皆さんがこれから歩む医学の道の傍らには、いつも北大医学研究科博士課程があることを覚えておいてください。最近、若い卒業生の中には、大学院で学び医学博士の学位を取得することと専門医になることが、あたかも対立する目標であるかの如く考える人が多いと聞いております。私は、それは誤りであると思います。専門医とは実用知識や技術のみに長けた医師ではありません。自らを第三者化できる批判力や困難な問題にぶつかった時の応用力こそが専門医の必要条件であり、これらがなくては真の専門医とは言えません。これらは大学院博士課程における研究の経験によって最も効率的に学ぶことができます。私は、皆さんが医学部を卒業した後、人生の然るべき時期に北海

道大学大学院医学研究科博士課程へ進学し、そこでの勉学の結果として医学博士の学位を取得することこそが、真の専門医になる最短の道であると確信しております。最後に、私は皆さんが自分の富や名誉のためではなく、病に苦しむ人々を救うためにこの医学の道を志したと信じます。今、皆さんが勉強をするのは、自分の卒業のためではありません。将来、皆さんの治療を受ける人々のために勉強するのです。その中には皆さんの家族がいるかも知れません。その時のために、今、上述した準備を十分にしておいてください。私は皆さんが初心を忘れることなく勉学に励み、心身を鍛え、6年後に全員がそろって医学部を卒業し、医師として次の夢を追う日が来ることを心から祈念します。

ご 挨 拶

感覚器病学講座眼科学分野 教授 石 田 晋



2009年4月1日付けで眼科学分野教授を拝命いたしましたので、医学研究科の諸先生方にご挨拶申し上げます。

私は、1965年東京生まれです。1990年に慶應義塾大学医学部を卒業し、小口芳久教授の慶大眼科で臨床研修を開始しました。

栃木県佐野厚生病院への出向と引き続く慶大眼科での助手時代は、多くの手術症例を経験させていただいた臨床一筋の10年間でした。特に、眼科専門医を取得してからは、失明原因の多くを占める網膜疾患の手術を担当してまいりました。しかしながら、血管新生を合併する難治性の網膜疾患では手術治療そのものに限界があることに気付き、研究の道に入ることになりました。そこで、岡田保典教授の病理学の門を叩き、研究の重要性を痛感いたしました。その後、2001年からハーバード大学に留学し、この研究に没頭した4年間で、現在の自分のメインテーマの基礎となる論文を発表させていただきました。研究成果の一部は、抗血管新生療法という新しい薬物療法の確立に貢献できたため、とても

幸運でした。そして帰国してからは、坪田一男教授率いる慶大眼科の講師・准教授として、臨床では術者として若手を指導しながら、研究では研究室主任として大学院生の指導に当たってまいりました。

私は、慶大医学部の若手指導者育成プロジェクトにおいて競争的に獲得したスペースに、網膜細胞生物学研究室と名付けた研究室を設立しました。ここで生活習慣病と眼疾患の関連に焦点を当て、レニン-アンジオテンシン系による分子病態を解明してまいりました。これら一連の病態解明の仕事により、2008年に日本眼科学会評議員会賞を受賞し宿題報告として講演をさせていただきました。この研究室で多くの若手の学位指導を通じて、人を育てるという、大変ですがやりがいある仕事を今後も続けて行きたいと決意いたしました。

伝統ある北大医学部は、北海道全域の地域医療の中核であると同時に、世界に通用するアカデミック水準が要求されています。医師の人材不足という昨今の非常事態にこそ、全国からモチベーションの高い人材を集めて、診療・研究・教育の全ての分野において歯車の噛み合った教室運営をしていきたいと思っております。今後とも宜しくお願い申し上げます。

就 任 挨 拶

生化学講座分子生物学分野 教授 佐 邊 壽 孝



この度、7月1日より生化学講座分子生物学分野を担当させていただくこととなりました。4年前に退官されました西 信三教授の後任になります。何卒宜しくお願い申し上げます。

私は今年で52歳になりますが、思い起こしますと、私たちの世代が歩んで来ました時代

は日本の分子生物学の歩みとほぼ一致することになります。私は1980年に京都大学理学部を卒業し同修士課程に進みましたが、学部卒業研究は、大腸菌を用いた遺伝子クローニングでした。第一回日本分子生物学会は1978年に開かれており、遺伝子クローニングをテーマにした研究が広く日本の大学や研究所で取り上げられるようになったのも、この頃からでした。

一方、世界では70年代中盤に遺伝子クローニング技術の基礎は完成し、その直後には、理学部生化学教室の先輩である利根川進博士が抗体遺伝子の構造とその再編に関する一連の研究をNature誌に続々と発表されていました。日本では、京都大学医学部の沼正作先生が1980年にACTH遺伝子のクローニングをされ、その特異な構造を解明し世界を驚かせました。その後、日本も世界も、遺伝子のクローニングとその構造決定（蛋白質産物の一次構造決定）にしを削る熱病にかかったような時期がほぼ1990年初頭まで続きました。当時は、クローニングした遺伝子に特許をかけることも可能であり、遺伝子をクローニングすることがまるで医学生物学研究の全てであるかのような風潮さえありました。私も大学院博士課程から助手の時代にかけてその真っ只中におりました。

遺伝子クローニングや構造決定は分子生物学にとりまして大きな位置を占めますが、そのようなことがそのまま分子生物学ではありません。申すまでもありませんが、分子生物学は1930年代半ばに、理論物理学者達の参画もあり始まった新しい方法論を持った生物学です。当時、生化学的分析学的方法論を中心とした生命や疾患の理解は既に順調に進んでいました。一方で、生命は全体としてのシステムであり、その本質的な理解には、このような分析的方法論だけでは不十分であることは強く認識されていました。分子生物学は分子レベルでの生命現象の理解を目指す学問である、と理解されていることが多い

ようですが、必ずしもそのような意味ではなく、生命の本質の理解を目指し「仮説（理論的直観）とその実験的検証」という、それまでは主に物理学などで用いられていた方法論を主体とする学問体系です。当時、新しい生物学であるので、かつこ良くMolecular Biologyとよんだのが始まりです。

物事を「理解する」ということは、その構成要素の全てを知ることでは必ずしもありません。物事の「本質的理解」とはそのシステムの原理を理解することです。このことは例えば、コンピューターを分解してその電子回路図の詳細を描きだしてもその「本質（作動原理）」を理解することは非常に困難であり、他の方法論も併用し、コンピューターは2進法に基づくある種のアルゴリズムで作動していることを解明することが「本質的理解」である、と考えればよくわかると思います。本質的理解ができれば、その先が見えます。

とはいっても、私たちの分野の日々の研究は、電子回路図を描き出すための各コンポーネントの単離・同定とそれらの間を連携するシグナル経路の解明に費やされています。私たちは癌細胞の浸潤や転移のメカニズムを主に研究していますが、癌研究において、このようなコンポーネントを描き出す研究は、予後予測や治療法開発に欠かせないものです。一方で現在、細胞のlong-term dormancyにアプローチする手立てを考えています。これは、転移巣での癌細胞の挙動とも密に関連いたしますが、本来は増殖することを目的として生まれたと考えられる細胞が、長期に渡り増えもせず死にもしない平衡（定常）状態を保てるのは何故なのか、そのシステムに大きな興味があります。このような問題の理解には、おそらく、分子生物学が本来根ざして来た方法論が威力を発揮すると考えています。論文を書くときにはなかなか表には出ませんが、私自身、これまでも「仮説とその実験的検証」を主な手段にして参りました。このような研究方法は、自然と自己との対峙でもあり、わくわくするものです。同じようなことは、一般相対性理論の特異点定理を示しBig Bang仮説でも知られるS. Hawking博士も述べているのを讀んだことがあります。私たちの研究室では、今後癌研究を推し進めると同時に、cell dormancyのような生物学の根本問題にも果敢にアプローチし、「医学」と「生命の本質的理解」に貢献する事を目的としています。

寄附講座紹介「脊椎・脊髄先端医学講座」

教授(兼) 三 浪 明 男
特任講師 須 藤 英 毅



平成21年4月1日から新しく新設されました寄附講座「脊椎・脊髄先端医学講座」についてご紹介致します。

高齢化社会における運動器の役割に注目が集まる中、体幹を支える中心である脊椎とそれをコントロールする脊髄は運動器の重要な構成要素です。なかでも腰痛は一生に7割以上の方が自覚するとされており、病院受診の原疾患として高血圧などとともに最多といわれるほど身近に経験する疾患です。高齢者社会の到来とともに腰痛は介護面、また自立した健康的な生活をおこなう上での大きな障害として認知され、現代医学にお

いて社会的にも克服すべき重要なテーマであるといえます。そのほか骨粗鬆症による椎体骨折や関節リウマチによる脊椎・脊髄病変、透析脊椎症など整形外科関連の疾患罹患者が年々多くなっており、脊椎・脊髄に関連する健康増進や要介護状態の予防を目指す研究分野と、それを発展させた治療法の開発に多くの期待が寄せられています。

脊椎・脊髄疾患に対する治療には従来から脊椎固定術や摘出術などの外科的治療が普及し一定の成果が確認さ

れておりますが、術後の新たな隣接椎間障害の出現などといった機能障害が認知され、その限界と代替医療の可能性に注目が集まっています。当講座では今後需要の増加が予想される脊椎・脊髄病疾患に対する先駆的治療と疾病予防を推進するために、最小侵襲手術法の研究、脊椎固定法と使用インプラントの研究、脊椎・脊髄病変性疾患に関する分子生物学的手法を用いた病態の解明および変性予防と組織再生に関する研究に従事しています。具体的には1) アポトーシス・細胞周期関連遺伝子を用いた椎間板組織の変性制御機構の解明、2) 骨粗鬆症性椎体圧潰に発現する遺伝子解析と予後予測に関する臨床応用、3) 骨粗鬆症性椎体圧潰、透析脊椎症に対する低侵襲脊柱再建術の開発などです。これらの研究に対し既に文部科学省科学研究費補助金や上原、中富、整形災害外科学助成財団などから多くの研究費を拝受しております。

今後これらの研究成果により現在の脊椎・脊髄疾患における諸問題を解決し、治療、変性の予防、組織再生に関する新しい方法論を確立することができるものと期待しております。臨床的にも既存の整形外科分野で行っているコンピュータ支援手術や脊椎内視鏡を応用した低侵襲脊椎手術、高度脊柱変形に対する3次元矯正手術など幅広い脊椎・脊髄疾患の治療と密接に連携しながら、新時代の先端的治療法の開発に大きく貢献したいと考えておりますので、今後とも寄附講座「脊椎・脊髄先端医学講座」にご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

高松宮妃癌研究基金学術賞を受賞して

北海道大学病院 病院長 浅 香 正 博

このたび第38回高松宮妃癌研究基金学術賞を受賞することができ大変光栄なことに感謝の気持ちで一杯です。高松宮妃癌研究基金は、「癌撲滅」を発意された故高松宮妃殿下が、同級生とともに組織された「なでしこ会」の15年にわたる募金活動で得た資金を基本金として昭和43年に発足した基金で、優れた癌研究に対して助成活動を行っております。高松宮妃癌研究基金学術賞の第1回は久留 勝国立がんセンター総長と中原和郎研究所所長（いずれも当時）、第2回は杉村 隆国立がんセンター研究所生化学部長（現在名誉総長）が受賞されています。最近では、その年の癌研究に最も功績のあった基礎研究から1題、臨床研究から1題が選ばれることが多くなってきておりました。これまで受賞された本学関係者は、昭和51年度（故）牧野佐二郎先生（理学部）、昭和63年度大塚榮子先生（薬学部）、平成16年度辻井博彦先生（放射線医学総合研究所、昭和52年まで本学医学部）、平成17年度鎌滝哲也先生（薬学部）の4名であり、医学研究科・医学部所属者としては私が初めての受賞になります。受賞の理由は、これまで長年にわたって続けてきたヘリコバクター・ピロリと胃癌の関わり、特に除菌による胃癌予防の道を開いたことが大きかったようです。ヘリコバクター・ピロリが胃炎の重要な起炎菌であり、長期感染により萎縮性胃炎を引き起こし、腸上皮化生を経て最終的に胃癌を発生させることは疫学や動物モデルで明らかになってきました。ここ数年は、ヘリコバクター・ピロリを除菌することによって胃癌の発生を予防できるか否かが最も重要な問題として国際的にクローズアップされてきており、世界中からいくつものプロジェクトが立ち上がりました。しかし、そのどれもが両者の関わりについて明確な結論を出すことなく終了していました。私は、1996年から2000年まで文部科学省の特定研究“ヘリコバクター・ピロリと胃癌の発生”班の代表を務め、疫学的にわが国のヘリコバクター・ピロリと胃癌の関わりを明らかにしました。この班が終了した後、除菌による胃癌予防のプロジェクトを文部科学省の特別推進研究として提出したところ、3年に亘って未採択の結果に終わりました。理由は、このような臨床研究は文部科学省の意図する科学研究とは相容れないということでした。わが国の公的な資金による研究とは基礎研究のことを意味し、臨床研究をほとんど評価していないという現実に接し、公的な資金に頼らない研究を目指し、Japan Gast Study Groupという臨床試験のための研究グループを立ち上げました。お金をかけずに短期間で終了でき、それでいてハイレベルの臨床試験を行うことを目的としてデザイン

の検討を行った結果、内視鏡治療を行った後の早期胃癌患者を対象に除菌、非除菌を無作為に振り分ける前向き試験を行うことにしました。この患者の胃粘膜は通常より5-10倍胃癌の発生が多いことが明らかになっていました。集まった505例の症例を無作為に二群に分け、1年に1回の内視鏡検査を行いながら3年間観察しました。その結果、除菌群から9例、非除菌群から14例の異所性胃癌の発生が見られ、有意に除菌は胃癌発生を抑制しておりました。この論文は2008年のLancetに掲載され、国際的に大きな反響を呼びました。Lancet OncologyやAnnals of Internal Medicineのような一流誌で高い評価をされただけでなく、ロイターやBBCさらにはNew York Timesの科学欄でも高い評価を受けました。この論文を受けて日本ヘリコバクター学会は、ヘリコバクター・ピロリ感染症はすべて除菌を行うべきであるとの画期的なガイドライン改訂を行い、厚生省も保険適用に前向きに動いてくれ、本年中に胃・十二指腸潰瘍に加え新たに3疾患が保険適用になる予定になっています。

高松宮妃癌研究基金学術賞の選考委員会（委員長は杉村 隆国立がんセンター名誉総長）は、ヘリコバクター・ピロリ除菌による胃癌予防への道を切り開いたとの理由で私と共同研究者の上村直実国立国際医療センター内視鏡部長の2名を平成20年度の高松宮妃癌研究基金学術賞（臨床部門）に選定しました。本年2月24日高松宮妃癌研究基金総裁の三笠宮寛仁親王殿下より直接学術賞をいただきました。国立がんセンターの歴代総長を初めとするわが国の癌研究の大御所の方々の列席のなかでの授賞式は身に余るものでありましたが、癌研究における臨床研究の重要性がようやく認められたことに関して感慨深いものがありました。この研究をサポートしていただいた医学研究科を初めとする多くの人たちに心より感謝いたします。



三笠宮寛仁殿下より上村先生とともに表彰を受ける筆者（左側）

「学位審査中間審査」本実施について

副研究科長 吉 岡 充 弘

平成19年度に大学院医学研究科が再編され、その学位審査方法も大きく変わることとなりました。学生個々の研究進捗状況及び学位論文作成状況等の内容に応じて、審査員の指導・助言をもって、標準修業年限4年で課程修了できるようにと、中間審査が導入されました。今年度、以下の要領で医学研究科博士課程中間審査が実施されましたが、いくつかの問題点も浮かびあがってきました。

実施期間は5月11日から15日の5日間で、審査対象者は平成19年度入学の博士3年次学生95名のうち、休学者2名、研究指導委託中（千葉県）で諸事情により帰札が困難であった学生を除く92名でした。審査は指導教員を除く本研究科の分野等の教授又は学位論文指導教員資格を有している准教授からキーワードマッチング方式で3名が選出され、キーワードマッチング1位の教員を主査とし、審査会の司会・進行を行いました。

審査結果は88名が合格しましたが、4名が不合格と判定されました。これらの不合格者については8月3日～7日に再審査を、同一の審査員で実施することとなりました。

新しいシステムの導入については「学位審査トライアル委員会」を設置し、その本実施にむけて準備作業を進

めてきましたが、今回の中間審査本実施については各委員から以下の指摘がなされました。今後、これらの点を踏まえ来年度の中間審査を改善していくことになります。

①明確な合否基準の設定

合否基準の明確化により、審査員間のばらつきを収束させるとともに、「否」と判定された学生への指導体制を整える。

②審査員の選考基準および方法の見直しとミスマッチの解消

キーワードマッチングによる公平性を保持しつつ、適否を考慮の上、審査員を決定することにより、適確な指導を担保する。

今回の中間審査では平成22年度に3年次に進級する学生全員（短縮修了予定者及び長期履修者を含む）が対象となります。この中間審査の位置づけは重要で、中間審査を経なければ、最終審査を受けることは出来ないこととなっています。全く研究等が進んでいない学生でも義務づけられていますので、対象となる学生および指導教員は準備のほど、よろしくお願いいたします。

新入生合宿研修に参加して

21組担任 微生物学講座病原微生物学分野 教授 有 川 二 郎

平成21年度医学部医学科新入生の合宿研修が例年のように、4月11日から12日まで1泊2日の日程で大滝セミナーハウスで実施されました。10年くらい前に一度参加しただけでしたが、今回は21組担任ということで22組担任の筒井裕之教授とともに参加しました。その経過報告を簡単にさせていただきます。いろいろありましたが、



とても楽しかったです。

朝9時50分、医学部玄関前に集合、新入生1名をのぞき全員が出席とのことでした。1名かけたのが残念ですが、まあ、よい方だと思います。バスの中、2年次新歓実行委員会委員による恐ろしくぶっきらぼうな点呼の後、10時にバスが予定通り出発しました。いよいよバス3台の大部隊で移動です。

車内では、まず型通りの自己紹介があり、その後は席の近い者同士で“ぺちやくちゃ、ぺちやくちゃ”です。よくまあ、絶え間なく話が続けるものだと感じました。若さでしょうか。もう、疲れました。ただ、いかんせん入学したばかりなので、共通する話題として受験勉強や入試の問題のことなどが多く聞こえてくるところが微笑ましい感じです。

そうこうしているうちに千歳の「まるごと市場」というお土産屋兼レストランに到着です。千歳で高速を降り

てから空港へ行くまでの間にありますので、今まで何十回も横を通っていますが、入るのは初めてです。しばし、新入生と共に観光客気分です。

幸いお天気にも恵まれ、残雪の中、快適なドライブだったのですが、ガイドさんの説明もそこそこに、またまた“ぺちやくちゃ、ぺちやくちゃ”です。その後、支笏湖畔を経由して無事大滝セミナーハウスに到着しました。

到着後早速、下記の日程に従い、筒井裕之教授の司会により研修を開始しました。安田和則医学部長からの講話に続き、有賀正教授、吉岡充弘教授による研修が行われました。

(詳細、省略)

100人以上の参加ですので、セミナーハウスの食堂の能力限界付近のため、席待ちもちょっとありましたが、押し合いへし合いのなか、何とか夕食を済ませ、研修を再開しました。ここでは、岩永敏彦教授による実習ガイダンスと「アルコールの正しい飲み方」〈パッチテスト〉が行われ、少しづつ盛り上がってきました。引き続き、上級生による課外活動概要説明がありました。

その後、上級生は予定通り、10時ころに帰札しましたが、新入生同士で歓談が続きます。我々教員と事務職員は別室で歓談後、早々に寝たのですが、これから彼らの長い夜が始まることになります。まず、彼らは寝ません。受験勉強から解放され、本当に安心して楽しんでいる、という感じで、微笑ましく、その点はうれしいのですが、下のロビーから響き渡るあの「嬌声」と「バタバタバタッ」という音はかなりのものでした。トランプの「大貧民」^{だいひんみん}です。どうも流行っているようです。数分おきにトランプのカードの奪い合いが起きるため、その度に「ギャーッ」、「バタバタバタッ(手をテーブルにぶつける音)」、「ギャーッ、ギャーッ」、「バタバタバタッ」。もうろうとした頭の中でいつまでも響きわたっていました。

それでも朝になり、研修のスタートです。朝食時、となりに座った女子学生に、「いつ寝たの」と聞くと「7時でーす」と言います。今、8時ころですから、ほとんど寝ていません。「眠いでーす」とか言いながらすっぴんの肌に疲れはありません。一寸帰るのが遅くなったり、深酒をした翌日に、顔に疲れがにじみ出る私とは大違いです。若者の若さを実感し、「そうだ！若者はそうでなくっちゃ！」と寝不足の私もつかの間の元気をもらい嬉しくなりました。

二日目の研修は、前沢政次教授、小華和証志准教授、佐藤松治助手、そして私から講義、研修が行われました。

(詳細、省略)

私は「安全衛生及び学生生活」というタイトルで、冊子「学生生活の案内2009」を読み上げながら、最後の講義をしたのですが、最後にこの冊子に書かれている、北大校歌、「永遠の幸」の歌詞を紹介しました。そして、特に、その中の「友たれ永く友たれ」という歌詞を読み上げ、90期の諸君が、この歌詞の通り、これからの在学時、さらには卒業後も永く友として助け合って活躍して欲しいと話をし、……うるわしくまとめた積もりでした。ところが、「では、何か質問は」と聞いたところ、佐藤松治先生から、「先生！歌って下さい！」という想定外の質問がでました。「ガーンッ」。人前で久しぶりに顔が赤くなるのを感じましたが、せっかくの機会と覚悟を決め、皆にも起立してもらい、期せずして、校歌の大合唱？となりました。これを機会に、最近歌う機会の少なくなった校歌や寮歌についても親しみをもってもらえればと思いました。しかし、有賀教授から「先生、キーが少し高かったですね」と言われた時には、声がうわづっていたことに私は内心気づいていましたので、またまた、顔が熱くなりました。

とにもかくにも、このようにして無事、新入生合宿研修は終了しました。帰りは、洞爺湖のホテルで昼食後、無事、医学部に到着し、解散となりました。お疲れ様。

長文にお付き合いいただきありがとうございました。新入生合宿研修会の概要、雰囲気は伝わりましたでしょうか。いろいろあつてなかなかハードですが、若さをもろうと考えればそれも楽しいものです。彼らは皆、すばらしい若者でした。これまで参加されたことのない先生、来年参加されてはどうでしょう。

最後になりますが、研修会の準備等で大変にお世話になりました、事務部教務担当、齋藤嘉光係長、原田奈緒子さん、脇坂恭匡さん、どうもありがとうございました。

研 修 日 程

4月11日

研修Ⅰ

①「医学部長挨拶・講話」

安田和則 医学部長

②「医学部6年間のカリキュラムについて」

有賀 正 教授

③「全学教育の履修について」

吉岡充弘 教授

研修Ⅱ

①「医学研究実習ガイダンス」

岩永敏彦 教授

②「アルコールの正しい飲み方」〈パッチテスト〉

岩永敏彦 教授

4月12日

研修Ⅲ

①「共用試験及び臨床実習について」

前沢政次 教授

小華和征志 准教授

②「医師の守秘義務とコンピュータの利用」

佐藤松治 助手

③「安全衛生及び学生生活について」

有川二郎 教授



医学研究科・医学部医学科ロゴマーク・指定書体を作成しました

広報室 和田 雅子

広報室長 野々村 克也

このたび、医学研究科・医学部医学科のロゴマークをリニューアルし、指定書体を作成しました。本件は、執行部会議の承認を経て、正式に医学研究科・医学部医学科のロゴマーク及び指定書体として決定されましたのでご案内いたします。

これまで利用されてきたロゴマークは、当研究科・学科の正式なものとはなっていませんでした。そのためにデータもなく、印刷物等の制作等、広報業務に不都合が生じておりました。この度これらのデータを作成するにあたり、当該ロゴマークを正式に当研究科・学科のものとし、指定書体も加えて制定することになったものです。このあたりの部分を含めまして、以下に少々歴史や、正式制定等までの経緯やご利用案内等についてご紹介させていただきます。

■ロゴマーク誕生の経緯

本ロゴマークができましたのは平成9（1997）年のことで、意匠を考案されたのは、当時、解剖学第三講座の阿部和厚教授です。マークが作られた経緯等につきまして「同窓会新聞」96号に阿部先生のご執筆された記事、また89号に北大医学部旗の誕生に関する記事がありましたので、こちらからとりまとめてご紹介させていただきます。

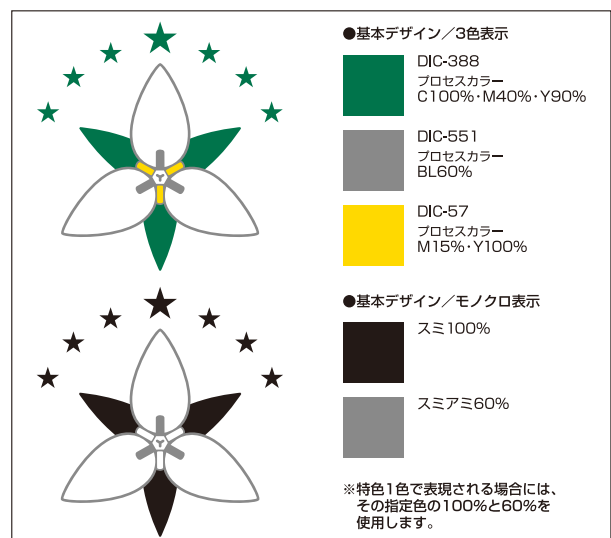
平成6（1994）年、ロゴマークの意匠が誕生する前に、現在研究科長室に置いてあります北大医学部旗が作られました。東医体での開会式等で、我が医学部の旗がなく寂しい思いをしたというところから、同窓会、校友会が折半し、百万円の予算で作成したものです。デザインは、東医体運営委員会のメンバー等によって、北海道大学のシンボルマークにもなっているオオパナノエンレイソウ

をモチーフに作られました。阿部先生は、この医学部旗が決まったことで、医学部が出す正式な手紙にあしらうレターヘッド用のロゴマークを考案されました。国際交流が盛んになってきている時に、レターヘッドがないのは「様にならない」との思いからです。こうして3年後にはロゴマークが完成したのですが、北海道大学と医学部を象徴する、美しくも品格のある意匠は、今日現在まで数多くの皆様に利用されています。

■新しいロゴマークと指定書体

この度のロゴマーク正式制定にあたり、花の上部にあしらわれている星印を六芒星から五芒星に変更しました。ここであらためてロゴマーク・指定書体をご紹介します。

○ロゴマーク



《ロゴマークの意味》

歴史ある北海道大学を象徴するオオバナノエンレイソウに、本研究科・医学部医学科で医学・医療を学び、実践する学生・研究者の高い志と使命への忠誠の思いを込めました。中央部にあしらわれたおしべ・めしべは、未来に向けて豊かな才能が結実していく繁栄のようすを象徴しています。花の周囲に配しているのは万物の五要素をあらわす五芒星。同窓生と世界が見守る中、ひととき大きく輝く医学研究科・医学部医学科の存在を表現しています。

○指定書体

●和文ロゴタイプ／フォークM

北海道大学
大学院医学研究科
医学部医学科

北海道大学 北海道大学
大学院医学研究科 医学部医学科

●英文ロゴタイプ／Helvetica Neue 63 Medium Extended

HOKKAIDO UNIVERSITY
Graduate School of Medicine
School of Medicine

HOKKAIDO UNIVERSITY
Graduate School of Medicine

HOKKAIDO UNIVERSITY
School of Medicine

《指定書体》

この度新しく指定した書体は以下の通りです。

和文ロゴタイプ → フォークM

英文ロゴタイプ → ヘルベチカ

Neue63 Medium Extended

いずれのロゴタイプも本研究科・医学部医学科の指定書体ですが、使用を義務づけるものではありません。ご

利用については任意となっております。

■ロゴマーク・指定書体のご利用方法

ロゴマーク・指定書体のご利用にあたっては、以下の要領となっております。

○ロゴマーク・指定書体ハンドブックを配布します

ロゴマーク・指定書体ハンドブックを各講座のポストに入れさせていただきます。当該ハンドブックに、各種ロゴマークのヴァリエーション、利用方法を紹介しています。

○ご利用方法①

- ・医学研究科・医学部医学科ホームページ内に「医学研究科・医学部医学科ロゴマーク」のページを新設します（9月17日オープン）

「大学院医学研究科・医学部 内部向けのお知らせ」から入ってご利用下さい。

- ・ロゴマーク・指定書体ハンドブックPDF、各利用用JPEG等のデータをダウンロードしていただけます。

○ご利用方法②

- ・印刷等にご利用の場合は、イラストレーターのデータをご用意しています。こちらは広報室までお問い合わせ下さい。

以上、新しくなったロゴマーク・指定書体を、ぜひご利用下さい。本件については、広報室にお気軽にお問い合わせ下さい。

広報室（東北棟 1 階エレベーター横）内線5064

e-mail : pr-office@med.hokudai.ac.jp

医学部創立90周年記念事業募金活動　－第11報－

－募金全体額が4億5千万円を突破しました－

医学部創立90周年記念事業基金の募金活動についてお知らせします。平成21年7月末現在の募金の納入状況は表のとおりとなっています。全体額が4億5千万円を突破しました。前回報告（平成21年3月31日現在）と比較して5千万円超の大幅な増加となっています。本募金活動へのご理解とご協力に心より御礼申し上げます。なかには追加募金を申し出られた有志もおられ、おおいに感激しました。

ご承知のように、平成18年9月にスタートした医学部創立90周年記念事業計画の一部が変更されています。繰り返しになりますが、いま一度確認させていただきます。募金活動の変更の要点は、当面の募金目標額を5億円とし、募金期間を1年間延長するということです。また、

これまで個人募金は1口10万円とし、任意の額のご寄附も受け付けておりましたが、本年4月からは1万円単位のご寄附も可能となっています。

したがいまして、新たに設定された募金目標額5億円まであと約4千6百万円となり、募金期限は平成22年3月末までとなっています。これまでと同様、本事業の趣旨についてより一層のご理解をいただけるよう、幅広い募金活動を展開していく所存です。

募金期限まであと8ヵ月を残すのみとなりました。医学部教員はもとより同窓生の皆様・学生の父母の皆様、また関係各方面の皆様におかれましては、引き続きご理解とご協力をお願いする次第です。

寄附金納入状況（H.21. 7.31現在）

寄附金合計　　454,341,552円

◎教　員		251名／ 438名（57.3%）	44,170,000円
（内訳）			
医　学　科	専任教員	120名／ 151名（79.5%）	25,540,000円
	特任教員	10名／ 30名（33.3%）	790,000円
病　　院	専任教員	93名／ 174名（53.4%）	12,020,000円
	特任教員	2名／ 5名（40.0%）	300,000円
保健学科	専任教員	26名／ 78名（33.3%）	5,520,000円
◎分　野		2件	1,300,000円
◎同門会（団体）		2件	2,000,000円
◎同窓生（教員は除く）		1246名／6010名（20.7%）	221,701,667円
◎学生の父母		120名／1434名（8.4%）	14,279,885円
（内訳）	医　学　科	93名／ 598名（15.6%）	11,859,885円
	保健学科	27名／ 836名（3.2%）	2,420,000円
◎大学院生		1件	210,000円
◎法人等		214件	164,970,000円
◎篤志家 （団体・個人（同門会員を含む））		33件	5,710,000円

ご寄附いただいた法人・企業・団体等

1	医療法人	愛全会	73	特定医療法人	北楡会
2	医療法人	あすくレディースクリニック	74	特別医療法人	明生会
3	医療法人	いしかわクリニック	75	特定医療法人社団	カレスサッポロ
4	医療法人	美しが丘眼科	76	特定医療法人社団	千寿会 三愛病院
5	医療法人	英生会 野幌病院	77	特定・特別医療法人	函館渡辺病院
6	医療法人	エム・ティール・エヌ 北海道泌尿器科記念病院	78	一般社団法人	女性の健康と医療を守る医師連合
7	医療法人	延山会	79	小樽循環器病院	
8	医療法人	王子総合病院	80	太田医院	
9	医療法人	亀田病院	81	釧路泌尿器科クリニック	
10	医療法人	歓生会 豊岡中央病院	82	総合病院	北見赤十字病院
11	医療法人	清田病院	83	総合病院	伊達赤十字病院
12	医療法人	溪仁会	84	広田医院	
13	医療法人	啓生会病院	85	池田暖房工業株式会社	
14	医療法人	恵哲会	86	エア・ウォーター株式会社	
15	医療法人	研成会	87	エフビー株式会社	
16	医療法人	耕仁会 札幌太田病院	88	学校法人	函館佐藤学園
17	医療法人	康清会	89	株式会社	アインファーマシーズ
18	医療法人	札幌グリーン病院	90	株式会社	アークス
19	医療法人	札幌西の峰病院	91	株式会社	アミノアップ化学
20	医療法人	彰和会 北海道消化器科病院	92	株式会社	エスアールエル
21	医療法人	樹恵会 石田病院	93	株式会社	大林組 札幌支店
22	医療法人	新札幌整形外科病院	94	株式会社	グランビスタ ホテル&リゾート 札幌グランドホテル
23	医療法人	仁友会 北彩都病院	95	株式会社	玄米酵素
24	医療法人	仁楡会	96	株式会社	島津製作所 札幌支店
25	医療法人	正観会 御野場病院	97	株式会社	工成舎
26	医療法人	千隆会 岸原病院	98	株式会社	ジーンテクノサイエンス
27	医療法人	つつみ整形外科クリニック	99	株式会社	スクウェア・ワン
28	医療法人	禎心会 セントラルC Iクリニック	100	株式会社	太陽グループ
29	医療法人	糖生会 大通り内科クリニック	101	株式会社	竹山
30	医療法人	徳洲会 札幌徳洲会病院	102	株式会社	ツルハホールディングス
31	医療法人	ひまわり会 札幌病院	103	株式会社	難波薬局
32	医療法人	西病院	104	株式会社	日本製鋼所
33	医療法人	中江病院	105	株式会社	間組 札幌支店
34	医療法人	母恋(旧 医療法人社団 カレスアライアンス)	106	株式会社	フィリップスエレクトロニクスジャパン
35	医療法人	北海道整形外科記念病院	107	株式会社	富士メガネ
36	医療法人	萬田記念病院	108	株式会社	ほくやく
37	医療法人	山田眼科	109	株式会社	北洋銀行
38	医療法人	もみの木会 わたなべ整形外科	110	株式会社	ムトウ
39	医療法人社団	愛心館	111	株式会社	メディカルイメーজラボ
40	医療法人社団	石山医院	112	財団法人	協済会
41	医療法人社団	石山内科循環器科クリニック	113	三協ラボサービス株式会社	
42	医療法人社団	いずみ会 北星病院	114	ジーイー横河メディカルシステム株式会社	
43	医療法人社団	いぶり腎泌尿器科クリニック	115	新日本製鐵株式会社	
44	医療法人社団	栄仁会 栄通わたなべ内科	116	スミス・アンド・ネフューエンドスコピー株式会社	
45	医療法人社団	エス・エス・ジェイ 札幌整形循環器病院	117	大成建設株式会社	
46	医療法人社団	慶愛会 札幌花園病院	118	戸田建設株式会社 札幌支店	
47	医療法人社団	恵水会 田島クリニック	119	日本光電工業株式会社	
48	医療法人社団	健心会 桑園病院	120	日本製薬団体連合会	
49	医療法人社団	幸和会 くとしん外科胃腸科	121	日本電気株式会社	
50	医療法人社団	五風会 さっぽろ香雪病院	122	日本メジフィジックス株式会社	
51	医療法人社団	廣仁会	123	柏楊印刷株式会社	
52	医療法人社団	清水内科医院	124	富士ゼロックス株式会社	
53	医療法人社団	司馬内科クリニック	125	丸水札幌中央水産株式会社	
54	医療法人社団	信洋会 石山病院	126	三笠製菓株式会社 札幌支店	
55	医療法人社団	信和会 石川泌尿器科	127	三菱化学メディエンス株式会社	
56	医療法人社団	センチネルクリニック	128	第一管区海上保安本部刑事課有志一同	
57	医療法人社団	寺島整形外科	129	北海道電気工事株式会社	
58	医療法人社団	苫小牧緑ヶ丘病院	130	北海道医薬品卸売商業組合	
59	医療法人社団	豊平おおたこどもクリニック	131	北海道厚生農業協同組合連合会	
60	医療法人社団	西谷皮膚科医院	132	北海道コカ・コーラボトリング株式会社	
61	医療法人社団	ブリモウイメンズクリニック	133	北海道電力株式会社	
62	医療法人社団	平成醫塾 苫小牧東病院	134	北海道バイオシステム株式会社	
63	医療法人社団	萌生舎 宮の沢泌尿器科クリニック	135	北海道旅客鉄道株式会社	
64	医療法人社団	朋友会 石金病院	136	北海道和光純薬株式会社	
65	医療法人社団	北斗	137	北海道大学医学部精神医学教室同門会	
66	医療法人社団	友愛会 恵愛病院	138	北海道大学泌尿器科同門会	
67	医療法人社団	養生館 苫小牧日翔病院	139	北海道大学大学院医学研究科腎泌尿器外科学分野	
68	医療法人社団	我汝会 えにわ病院	140	北海道大学生協同組合	
69	医療法人社団	康仁会 中田泌尿器科病院	141	北海道大学大学院医学研究科腫瘍病理学分野	
70	社会福祉法人	函館厚生院 函館中央病院			
71	特定医療法人	修道会 本田記念病院			
72	特定医療法人	仁愛会 浦添総合病院			

H21.7.31ご入金分まで

掲載の許可をいただいた法人・企業等のみ掲載しています。(順不同)

第48回医学展 総括

第48回医学展代表 福田 直 樹

本年度も、北大祭実行期間中の6月6日（土）、7日（日）、第48回医学展を開催いたしました。両日とも生憎の雨ではありましたが、合わせて3000人以上の来場者があり、大変な賑わいを見せました。運営段階では様々な課題が浮き彫りになり、産みの苦しみも多々ありましたが、結果として様々な方面からご好評の声をいただき、医学展としての役割を全うできたのではないかと感じております。各企画の詳細は後述いたしますので、ここでは実行委員会の運営について何点かご報告させていただきます。

本年度医学展における運営側の取り組みと致しまして、医学展そのもののスリム化があります。医学展実行委員会は「委員会」を冠しているものの、恒常的に運営されている機関ではなく、医学展の時期に合わせて有志が自主的に結成し、終了後に解散する特殊な団体です。このため参加者を募るのに例年難渋しており、今年は身の丈にあった運営を目指して企画全体の見直しなどを行いました。結果、獣医学祭と内容の被っている盲導犬の体験、榆稜祭と内容の被っている実験教室など、例年人気であった企画がいくつか消滅となってしまう、批判の声もありましたが、少ない人数でなんとか医学展を運営することができました。しかしながら、まず優先すべきは人員の確保で、企画のカットは苦肉の策であったと言わざるを得ません。来年度以降、人員の確保に目処が付けば、消滅した企画の復活は可能だと考えております。

このように、消滅した企画もあれば、新たに加わった企画もあります。今回は、IFMSA（国際医学生連盟）の協力により「ぬいぐるみ病院」、「SCORA」の2つの企画を新たに行うことができ、いずれも好評を博しました。詳細については後述いたしますが、少ない人員の中、新たな企画に着手できたことは、また来年度以降、新企画を行うことが可能であることを示す結果となったと思います。

いずれにしても、人員の面に関しては、今年は反省点だらけであったと感じております。暦の関係で4月末の大型連休が長く、実働部隊となる1年生の勧誘が5月にズレ込んでしまったことから、全体の作業の進行が大幅に遅れてしまい、指導に当たって頂いた病院の先生方や、実際に現場で働いた学生に、ご迷惑をかける結果となってしまいました。また、幹部クラスの人員集めにも苦労したため、昨年度実行できた「総務5人体制」を実行できず、数少ない幹部に負担がかかってしまったことも、大きな反省点です。人員確保の方法については、医学展が有志による活動である以上、永遠の課題と言えます。

てしまうかもしれません。医学展実行委員会を恒常化すべきだ、という声も聞かれますが、今後も議論してゆく必要があるでしょう。

このように、医学展が抱える課題は様々ではありますが、それと同時に医学展の持つ意義については、やはり大きなものがあると考えております。医学生と一般の方が直接交流できる数少ない機会であり、医学部の教育や学生の様子、日頃の成果を外に向けて発信する場であるとともに、学生にとっても普段は関わらない先輩や後輩、同級生と新たな関係を築く場となっています。実行委員長としては、拙い点が多々あったと思いますが、本年度、医学展に参加、ご協力いただいた皆様におかれましては、少しでも有意義だったと感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、第48回医学展の成功には、関係各位の皆様のご協力、ご支援が不可欠でした。改めまして、厚く御礼申し上げます。



《企画部門 講演会》

本年度は、大学外からお一人、大学内からお一人、医学展にお招きし、講演をしていただきました。初日（6日）には、日本を中心に活躍されているチベット人声楽家のバイマー・ヤンジン氏をお招きし、チベットの文化や生活、チベット人から見た日本、チベットの抱える問題についてご講演いただきました。軽快な調子でユーモアを交えつつも、心を打つ力強い内容で、最後には涙を流されている聴講者の方もおられました。1人の人間として、どう生きて、どういことができるのか、考える1つのきっかけとなる内容であったと感じております。

2日目（7日）には、北海道大学医学部皮膚科学講座の清水宏教授、並びに「表皮水疱症友の会」代表の宮本恵子氏にお越しいただき、難病である表皮水疱症の紹介、実際に患者が抱える日常的な問題から行政の対応の問題まで、ビデオやスライドを交えてご講演いただきました。



講演会に併せて、「表皮水疱症友の会」の会員の皆様を中心となって署名活動も行われ、多くの署名を集めることができました。このような難病は、まずとにかく多くの方にその存在を知っていただくことが、問題解決に重要であり、その意味では、今回の講演はとても意義のあるものであったと考えております。

両日とも非常に魅力的な内容であり、聴講者からは大変ご好評いただきましたが、やはり例年同様広報活動には苦勞し、なかなか聴講者が集まらないという問題は相変わらずでした。今年は、極力広報に予算を割きましたが、それでも効果は薄かったと考えられ、来年度以降更に改善していかなければならない点であると言えます。

《企画部門 障がい者体験》

お馴染みとなった企画の1つで、医学部管理棟前ロータリーにて、車椅子や妊婦、高齢者の体験キットを用いた体験会を行うものです。車椅子や妊婦、高齢者は、いずれも身近なものであるにも関わらず、そういった人々が抱える苦勞や問題などについてはなかなか目が行かないのが実情です。これらを、実際に身を持って体験することで、彼らがどういった時に苦勞をし、どうすれば手を貸せるのかを認識していただくことを目的としております。親子連れには車椅子体験が人気で、子供さんが車椅子に乗って大変さを実感した後、実際にお父さんに乗せてみる、など微笑ましい光景が毎年見られます。医学部生としなくても、一般の方々が体験によってどのような感想を抱くのかは、インフォームドコンセントの際などに役に立つ知識になると感じております。

《企画部門 献血》

今年で6回目となった北大祭医学展における献血は、医学部ロータリーに献血車を2台配備し、北大メインストリートを歩く人々に献血への協力を呼びかける、という形で例年通り行われました。天候には恵まれなかったものの、6月6日だけで100名を超える方の受付がありました。大学祭という場において献血を行うということにはやはり難しさもありますが、それでも毎年100人以

上の方にご協力いただけており、少しずつですが献血の意義が伝わりつつあるようです。

《救急部門》

本年度、救急部門では、AEDを用いた心肺蘇生講習会およびドクターヘリ見学会の2つの企画を行いました。

市民の方々は、心肺蘇生のイメージはあるものの、実際に行ってみると迷ってしまうなど、完全に理解して行っている方はあまり多くありませんでした。AEDについても、テレビ番組などでその存在についてはかなり流布しているものの、使い方についてはやはりあまり知られていないようで、まだまだ今回のような講習会を含め、知識を普及する必要性があると感じました。

また、本学医学展の名物となったドクターヘリ見学会には、時間前から多くの方が訪れ、迫力のある着陸では歓声があがっていました。ドラマなどの影響で、ドクターヘリの認知度は非常に高まっており、質疑応答では積極的な質問が見られました。土地の広い北海道においては、ドクターヘリは極めて重要な搬送手段であり、今後もこの企画を続けることで、理解を広めてゆきたいと考えております。

救急部門の企画運営におきましては、北大病院救急部の皆様、卒後臨床研修センターの皆様、手稲溪仁会病院ドクターヘリ関係者の皆様など、多くの方々のご協力を賜りました。お忙しい中、ありがとうございました。この場を借りて御礼申し上げます。

《検査体験会部門》

検査体験会部門は、医療現場で行われている様々な検査を学生が自ら行い、市民の皆様にもそれを体験していただくという、医学展の中心的な企画です。毎年これを目的に医学展にいらっしゃる方もおり、本学医学展の名物の1つとなっています。

今年度は人員の関係上、部門数を絞り、代謝、エコー、眼科、問診、アルコールパッチテストの5部門となりました。それでも、多くの来場者が検査を体験され、自分のデータに興味津々といった様子でした。特に、代謝部門は骨密度や血管年齢など、生活習慣が直結する分かりやすい検査が多いため、人気を博しました。

検査体験会は学生にとっても、実習以外ではなかなか扱えない検査機器の原理、使い方を勉強し、実際に検査することが出来るようになる、大変貴重な機会となっており、特にBST前の4年生は積極的に勉強会を行っていました。専門に入りたての3年生や、専門前の1、2年生も、指導のドクターや先輩の話に真剣に耳を傾け、知識を吸収しようという姿勢がみられました。

また、検査体験会のもう1つの意義といたしまして、検査を通した医学生と市民との交流があります。医学の

話から他愛の無い雑談まで、検査の待ち時間などを利用してたくさんのお話を市民の方々とすることができました。「頑張ってください」や「将来頼むよ」などと言った温かい言葉を多くかけていただき、今後の学業の良いモチベーションとなった学生もいるようです。

本年度も、検査体験会の開催に伴い、検査機器の貸し出しにご協力いただいた株式会社常光様や北大病院各医局の皆様、保健管理センターの皆様、当日待機ドクターを勤めていただいた先生方、その他多くの皆様のご協力を賜りました。この場で改めて御礼申し上げます。

《IFMSA（国際医学生連盟）による企画》

本年度は、IFMSA（国際医学生連盟）が主催する企画が2つ、新たに催されました。IFMSAは平素より様々な活動を行っており、その一環として医学展で企画を行ってみてはどうか、という医学展運営側の提案に乗って貰った形になります。

企画の1つ目は、「ぬいぐるみ病院」というもので、主に小さな子供向けに、ぬいぐるみを使った診療などを通して医療への恐怖感の除去や、ヘルスプロモーションなどを行うもので、全国様々な場所で行われているものです。今回はぬいぐるみ病院とともに、紙粘土を使い、実際の重量にあわせて作った臓器の模型なども用意され、子供たちだけでなくご家族の方も、実際に触って楽しめる企画に満足しているようでした。

企画の2つ目は、「SCORA」というもので、性教育を中心とした展示を行いました。性感染症の問題は、札幌市が抱える公衆衛生的問題の中でも最たるもので、大学祭というレベルの草根活動であっても、大変意義のあることだと感じております。特に若いカップルが、真剣な面持ちで展示を眺めている様子が印象的でした。

いずれの企画も、展示を通して市民と学生との間に輪が出来ており、コミュニケーションという観点からも良い企画であったと言えるでしょう。

お知らせ

◆ 中研究棟竣工披露及び祝賀会を開催して ◆

平成21年3月27日に医学研究科中研究棟改修工事が完了したことに伴い、4月3日（金）に竣工披露及び祝賀会が開催されました。まず始めに、完成したばかりの研究棟を見学し、その後、医学部食堂において祝賀会が開催されました。祝賀会では、野々村医学研究科副研究科

長からの挨拶に続き、嶋貫理事・事務局長（当時）から祝辞があった後、中村施設部長の発声により祝宴が始まり、本間医学研究科教授（前医学研究科長）の乾杯で盛会のうちに終了しました。

◆ 平成21年度 財団等の研究助成採択状況 ◆

財団法人等名	種 別	研究者名	交 付 金
大学共同利用機関法人情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所	2009年度共同研究A	笠 原 正 典	180,000
社団法人 日本皮膚科学会	基礎医学研究費	猪 熊 大 輔	500,000
財団法人 成人血管病研究振興財団	平成21年度学術研究支援	西 本 新	500,000
財団法人 喫煙科学研究財団	平成21年度研究助成	三 輪 聡 一	4,000,000
		吉 岡 充 弘	2,000,000
		秋 田 弘 俊	2,500,000
		別 役 智 子	5,000,000
		玉 木 長 良	2,000,000
財団法人 日本応用酵素協会	平成21年度研究助成	岩 永 ひろみ	1,000,000
財団法人 三島海雲記念財団	平成21年度学術研究奨励金	岩 永 敏 彦	1,000,000
財団法人 秋山記念生命科学振興財団	研究助成（一般）	秋 山 真 志	1,000,000
		外 丸 詩 野	1,000,000
	研究助成（奨励）	津 田 真寿美	500,000
		猪 熊 大 輔	500,000
財団法人 伊藤医薬学術交流財団	学会等助成	本 間 研 一	450,000
		福 田 諭	450,000
	交流助成	吉 岡 英 治	200,000
		大 村 優	200,000
	招聘助成	西 村 正 治	200,000
社団法人 全日本コーヒー協会	研究助成	神 谷 温 之	1,500,000
財団法人 日本リディオリリー協会	研究助成金	有 田 賢	500,000
ネスレ栄養科学会議	研究助成	神 谷 温 之	1,000,000
財団法人 石本記念デサントスポーツ科学振興財団	研究助成金	絹 川 真太郎	500,000
財団法人 札幌国際プラザ	札幌国際プラザ助成金	本 間 研 一	80,000
財団法人 北海道大学クラーク記念財団	博士後期課程在学学生研究助成	藤 田 靖 幸	500,000
		須 藤 洋 一	450,000
		夏 賀 健	500,000
		王 磊	500,000
		佐々木 知 幸	500,000

平成21年6月30日までの採択判明分

◆ 平成21年度科学研究費補助金採択状況 ◆

研 究 種 目	新規申請	継続申請	交付内定（採択）	平成21年度交付決定	
	件 数	件 数	件 数	件 数	交付金額
特別推進研究	0	0	0	0	0
特定領域研究	4	8	8	10	66,920
基盤研究（S）	3	1	1	1	22,360
基盤研究（A）	8	4	7	8	121,030
基盤研究（B）	24	14	23	19	145,860
基盤研究（C）	40	21	38	41	66,560
挑戦的萌芽研究	39	6	14	13	20,800
若手研究（S）	3	0	0	0	0
若手研究（A）	1	4	4	4	35,230
若手研究（B）	22	5	15	17	36,270
合 計	144	63	110	113	515,030

※交付内定は申請に対する採択のため、平成21年4月1日までの医学研究科の研究者の転入出を含まない。

※交付決定は平成21年4月1日までの医学研究科の研究者の転入出を反映させた数字

※採択率（新規・継続を含む） $110 \div 207 = 53.1\%$

※平成21年7月1日現在

広報室便り10

2009年4月より、安田研究科長の指導のもと、広報室長も白土先生から、野々村に交替致しました。しかし、広報室が出来てからの歴史は浅く、白土先生には引き続き広報室員としてご指導いただくことになっております。さて、その活動は少しずつ範囲を広げており、すでに医学部医学科案内2009を発行して皆さんにお届けするとともに、オープンキャンパスに向けて、医学部案内のDVDを刷新致しました。また、ホームページでは大学院入学などの諸手続きに必要な書類をダウンロードできるようにするなど、単に観ることから書類手続きを円滑にするような機能を付加しつつあります。今後も広報室活動を充実させていく所存ですので、皆様方のご協力をお願いすると共に、大いに活用していただきたいと思っております。

（野々村克也）

編集後記

この度、広報編集委員長を拝命致しました。昨今医学研究科・医学部も年を追うごとに実に様々な活動を展開していますので、医学研究科内部に居てもなかなかその全貌を完全に理解することが難しい場合もあるかと思ひます。北大医学部は今年創設90周年の記念の年を迎えますが、今後100周年に向かい、またその先のさらなる発展を目指すためには、研究・教育・診療活動をしっかり展開していくことが重要なことは言うまでもありませんが、医学部内部の相互理解と結束も大切なファクターの1つと思ひます。この広報はその一助となれるように頑張っていきたいと思ひますので皆様どうぞ宜しくお願い致します。尚、本40号は、安田研究科長から医学部学生へのメッセージも掲載されていますので、医学部の学生全員に配布しています。学生さんもしっかり読んでください。（広報編集委員長 田中伸哉）

— Home Pageのご案内 —

医学研究科／医学部医学科広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

goiken@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部医学科

発 行 北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科
広報編集委員会

060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡先 医学系事務部総務課庶務担当

電 話 011-706-5892

編集委員 田中 伸哉、白土 博樹、玉城 英彦
佐藤 松治